

サハリンで北方少数民族の
祭りを見た(一)さいとう
齊藤

マサヨシ

(写真家)



サハリンはユーラシア大陸の極東にあって、日本列島の北に連なる南北に伸びた島である。その地形は、明治の洋画家高橋由一の代表作「鮭」に似ている。

南と北では気候風土も異なる。日本がかつて統治していた南サハリンの景色は、ここは北海道と思うぐらいに似ている。しかし、北上してゆくとツンドラが現れ、日本にはない風景が見えてくる。

湿気の多いサハリンは森林資源にも恵まれている。日本統治時代には南サハリンで九つのパルプ製紙工場が稼働していた。また、森には、動く宝石といわれるクロテンが数多く生息している。

十七〜十八世紀、ロシア人は毛皮を求めて北から、日本人は魚類を求めて南からサハリンにやって来た。以来、ロシア、日本そしてロシアが時代を経て各々の文明を持ち込んで統治している。

しかし、本来の住人は誰なのか。そして彼らは今どうしているのか。そんな想いでサハリンへの旅となった。

ロシアには「漁師の日」という祝日がある。毎年七月の第二日曜日なので、そもそも休日である。

この日だけは漁業権のない市民も自分たちが食する分の魚介類を獲っても良いとのことらしい。

この日ロシア人は、家族で海岸へ行つてキャンプするのが恒例だ。夫は海に入って魚介類を獲り、妻や子供たちはそれをバーベキューにして大いに楽しむのだ。妻はウオッカを飲んで奇声をあげることが、海に入る夫は禁酒というのが習わしのことだ。

この漁師の日にはサハリンの中部にあるポロナイスクで、北方少数民族祭りが毎年開催されている。

私は二〇〇六年七月八日、ポロナイスクの街の東を流れる大河ポロナイ川を船に乗って、北方少数民族祭りの会場となる砂洲に渡った。

砂洲にはニブフやウイльтаなどの人々が大勢集まっている。皆が見守る中、祭りを主宰する民族の長老の男女が捧げ物を木製の器にのせて、ゆつくりと海に歩き出した。海に入った男女は、深々と頭垂れた。海の恵みに感謝する祭りが始まった。

(写真説明)北方少数民族祭りは、伝統の衣装を着た長老の男女が捧げ物を抱えて海に入り、神様に深々と頭垂れる儀式から始まった。二〇〇六年七月八日、ロシア・サハリン州ポロナイスクにて撮影。

(プロフィール)一九五五年、北海道稚内市生まれ。東京写真大学短期大学部(現東京工芸大学)卒業後、稚内市役所に勤務し、二〇一五年退職。稚内周辺、サロベツ、利尻島、礼文島、知床など北海道をサハリンを中心に撮影活動している。ロシア(おもにサハリン州)へは一九九二年より、計一五回撮影旅行を実施。